

# ゼウスの腿

再生医療の全盛前夜。  
医療倫理の限界を越えて、  
親は子に何ができるだろう？

草戸 棲家

表紙の写真はクリエイティブ・コモンズに基いて利用させていただいています。

[http://en.wikipedia.org/wiki/File:Zeus\\_Getty\\_Villa.jpg](http://en.wikipedia.org/wiki/File:Zeus_Getty_Villa.jpg)

Author Sdwelch1031, unknown artist

本作品はフィクションです。

# 目次

- 第一章 翼をください
- 第二章 確定診断という迷宮
- 第三章 重度身障者
- 第四章 再生移植医療モニター
- 第五章 マニラへ
- 第六章 最初のお仕事
- 第七章 忘れられた疑問
- 第八章 インスリノーマ
- 第九章 ドナドナ
- 第十章 転移
- 第十一章 思いがけない電話―とんでもない提案
- 第十二章 同種内臓器製造―COF
- 第十三章 パパの妊娠

第十四章 セールスマンの謝罪訪問

第十五章 ギジュツ的詳細―ガン臍臓のリサイクル

第十六章 素晴らしき新世界―パパが男を作って僕の代わりを産むシヨック

最終章 ゼウスの腿

## 第一章 翼をください

木々の緑を眼下に見て、黒い影が左から視界に入り込んできた。緑と空の青との切れ目、針葉樹の葉が青の手前に描く複雑な模様境界で、影は、細く鋭いくの字型の針を、左右二つ揃えて上下させている。それは翼だ。

翼の主は大きくはない。後ろへと流れる緑の手前で、羽ばたく度に左に揺れ、右に揺れしながら、両翼を下に振った瞬間だけちよつと上に移動し、翼を体に引き付けながら戻してまた少し下降する。そのカラスは視界の主と速度を競うようにして距離を保っていたが、何回目かの羽ばたきの後、翼を動かすのを不意にやめ、速度を落として視界から後退していく。真下を通って視界から後ろへ抜けるカラスの先には、目がくらむ速さで木々の緑がスクロールしていて、それに一瞬目を奪われた視界の主は、慌てて首を真っ直ぐに戻して遠くの地平を見定めようとする。その急な動作にもなつて思わず体に力が入り、両手に持ったそれぞれの取っ手から上へと伸びたロープがしなつた。そのしなりは僅かなものだったが、体を前後左右で吊

るしている四本のベルトに揺れとなつて表れ、男性の体を締め付けているハーネスを通じて、青いダウンジャケット越しに体に伝わった。彼は頭に白いヘルメットを被り、さらに身長のご二倍ほど上方には、さっきのカラスの翼とは比べ物にならない巨大な翼があつた。

オレンジの合繊が向かい風で膨らんで作るアーチ状の翼は、パラグライダーだ。しかし、彼の背中にハーネスと一体化して存在するのは、扇風機にも似た金属の覆いに囲まれた、直径一メートルはあろうかというプロペラだつた。それは今、ガソリンエンジンの原付が加速するような大きな音を立てながら回転している。この推力によつて、男はカラスを追い抜いたのだ。パラグライダーの揚力に、内燃機関の力を加えて速度を増した存在——パラモーター。免許が必要ないにも関わらず、最も危険とされている空中の競技。

しかし、その爽快感。その自由。どこまでもどこまでも、限界を越えて昇つていく。

そう、たとえば天までをも。

男が足の先をきゅつとすぼめた感じで、両足をぴったりと互いに押し付けるようにして揃えているのは、安定した姿勢を保つためだけではなかった。

「もうこれで、終わりにできる」

今、自らの手で人生を終えようとしている彼は、怯えているのだ。

もりとかずき

杜都和樹は、操舵のためのブレークコードの取っ手から右手を離し、グローブから先だけ出した指で手に持ったスマホをタップした。その指は寒さと緊張で震えている。両耳のカナル型ヘッドホンから聞こえてくるのは、「翼をください」を歌う低い女性歌手の声だ。荒れた震える唇が、思わずいつしよに口ずさんだ。

「白い翼……つけて下さい……」

一番の歌詞が終わる頃、三十五歳を前にして人生のどん底を感じた男は深呼吸をした。

「これだけは、一度でいいから味わってみたかった」

男はヘルメットを頭から外した。

手に握っているのはライターを思わせる大きさの黄色い直方体に、奇妙な針を入

れるタイプのスイッチの付いたコントローラ。スイッチには、コントローラと糸で繋がれたT字型の針が差し込まれ、彼の親指が今、それに回転力を加えようとしている。T字に捻りの力が加わって九十度回った瞬間、カチツという音をともなうて、コントローラに繋がれた黒く細いコードの中に一迅のパルスが発生した。それは、彼の背後、プロペラの下に付いている一本の棒の根本へと侵入する。いかにもロケットらしく装飾され、白い胴体に赤い安定翼のついた長さ八十センチの円筒。その中に、オレンジと青の火が一点起こったかと思うと、一気に噴出するのは爆発的な推力の雪崩。

モデルロケットからの反作用によってパラモーターは翼を後ろに引きずる形で加速し、呷られた男は斜め上を向き、ピンと張ったベルトに引きずられてますます姿勢を狂わせる。そうして最後には完全に上を向き、インメルマンターンを決めるようにロールをとる。そして、失速し、張っていた両翼が潰れた。

視界が回転する度に地面が迫ってくる。

かつてパラモーターでアクロバットをやっている連中を見た時、こいつらは死んで当然だと思った。しかも、自分はロケットモーターまで使っているのだ。まさに死んだほうがマシな死に方というわけだ。

誰にも迷惑はかからない。ただの所謂、キチガイ基地外つてやつだ。俺自身の責任にしかない。死体はいつしよに飛んでる奴らがすぐに発見してくれるし、血で汚れるのはただの荒れた草地だ。かける迷惑は最小限だ。

生命保険はもう加入して2年経っているから、たとえ自殺を疑われたとしても、生命保険金は俺の死後、息子の養育者となるであろう親戚にとどくだろう。

一人息子のヒロキのことが走馬灯として浮かび上がる。

「いやくん。えっち」

中二病にはまだ五歳も早いが、九歳のかわいらしくも悪戯ざかりの男の子は、アニメ番組に登場するキャラを真似るのに夢中だった。カーテンを締め切った部屋の

中は薄暗い。目の前は仏壇、その遺影に向かつて項垂れているのは、和樹。遺影の主は亡き妻、ヒロキの母親である。

全く反応しない父親のスルーにもめげず、母親が亡くなつて以来だんだんしまいこともおろそかになつて、溜まりに溜まつた台所の流しからカッププラーメンのカップを二つ拾つてきて、自分の胸にかぼつと取り付け、さらに「いやくん」と声を上げる。

これは、母親の代わりなのだろうか？ 俺に母親の代わりの女性のふりをして、はげまそうとしているのだろうか？ 九歳の息子が自分の悲しさを堪えて演じる演技に、さすがの和樹も頭のどこかで応えなければと声ができるが、手元口元は亡くしたものの大きさのあまり麻痺したままだ。

それでも応じない和樹に、今度は、胸につけていたカッププラーメンの丸いカップを、お尻につけて突き出し様に「いやくん」。女性の演技は、どうやら所謂しんちやんから教わつたものだったようだ。

それにもかかわらず反応しない和樹の前で、ヒロキがとつたのは、うつ伏せになつて動かなくなるというしんちゃんの得意技だった。しかし、その「死んだふり」

を妻の仏前で見た時——子供の思いつきでとられたものだと分かつてはいても——和樹の右腕はヒロキの顔面をとらえていた。

顔を覆って泣き叫ぶ少年。

和樹は自分でも啞然としつつも、自製の効かなさを訴えるように、動物のように叫びながら、ヒロキを抱きしめた。そのまま小一時間いっしょに父子は泣き続けた。

それが、和樹が中空で揉まれながら最後に思い出した、パラモーターを使った自殺という行為に至るまでの象徴的な出来事だった。

地面が目の前いっぱい広がる瞬間、ゆっくりと流れる視界の中で、自分の体が面白いように跳ねるのがわかった。回転する景色の最後に映ったのは、予想外の

——竹林。

そこで、視界は暗転し、何も感じなくなった。

## 第二章 確定診断という迷宮

長い長い迷宮ダンジョンの中を、杜都家の三人は放浪していた。

確定診断という迷宮。

病院に掛かれど掛かれど、ヒロキがときどき見せる嘔吐と脱力の原因は明らかにされなかった。

「技術が進んでいますから、今では診断できない病気なんてほとんどありません」  
妻が幼いヒロキを大病院に連れて行くと、決まって医師の言葉は誇らしげに聴こえた。

「世の中には、とても罹患率の少ない疾患が存在するのです。ご両親の思いすごしかもしれませんし、様子を見ましょう」

ひと通りの検査を行い、遠い通院を繰り返して突き付けられる何気ない医師の言葉は、ガンの告知とは全く逆の意味だったが、まるでそれに匹敵するように思われることもあった。あるいは、籠城した犯人に対する最後通知のように響いた。

診断が得られないという状況を突きつけられて調査し、初めて知ることになった  
真実。医療官僚主義の下では、難治性の特定疾患として日本で特定できる患者数に  
達しない希少疾患は、徹底的に排除される。希少の名の通り、欧米にはいくらでも  
患者数の少ない疾患が存在するのに。日本で研究し、専門とする医師集団がない  
わけだから、誰も守ってくれないし、存在が明らかになることもない。

医師にそう言って食い下がると、まるで嘘の症状を申告するモンスター・ペイシ  
ヤントを扱うかのような彼らの態度。

しかし、一体、私達がどんな罪を犯したというのだろうか？

罹患者の極めて少ない病気になるということ自体が、天の与えた罰なのだろうか  
？

実は和樹にはその罪に思い当たるフシがあった。

彼は、生まれつき体が弱かった。そのリスクを自覚していたため、ヒロキが産ま  
れる前に一億円の生命保険に加入した。ヒロキに嘔吐と脱力の症状を見た時、和樹  
は自分の子供時代にも、もっと軽かったが同じ種類の症状があったと気付いたのだ

が、確定診断を得るためにあまりにも真剣な妻の姿に、そのことを告白できなかつた。

罪人は自分である可能性が高い。何らかの遺伝病、しかしすぐに死ぬほど重くないものだ。そして何らかの理由により、自分よりヒロキの方が重く発症した。もしかしたら、妻の遺伝子との相性が悪かったのかもしれない。

だが、そんなことを口にしようものなら、家庭は壊れかねなかった。

そうして、卑怯にも、和樹はヒロキの世話を妻に任せきりにして、距離をとることにした。確信犯となつたのである。

不幸は続くもので、妻は交通事故で他界した。もしかしたら、迷える病気を抱える子の育児疲れにより、運転を誤ったのかもしれない。

妻の死と、ヒロキの通院のうちに、もともと丈夫でない和樹の方も体調が悪くなって失業してしまった。仕事を失っても体調は戻らず、収入が無いままヒロキの通院が和樹を苦しめた。

「お前さえ生まれて来なければ——」

そう叫びだしたい気分にも駆られても、ヒロキの病は和樹のものが継承されたに過ぎない。妻は知らずに死んでしまったが、真犯人は間違いなく、生命保険に加入しただけで義務を果たしていると自己満足で夕力を括った和樹自身なのだ。

思わずヒロキに暴力的になる自分自身が許せなかった。このまま駄目な父親として息子の人生に枷を残したくなかった。

そんな枷なら、存在しない方がいい。

言葉にしてしまえば何のことはない。息子と妻に対する罪の意識に再悩まされながら、生命保険を言い訳にして、自殺を選択することになった。

父から子に、残せるものは何もなかった。

いや、病因性の遺伝子と——まるで損害賠償のような死亡保険金だけ。

### 第三章 重度身障者

目の前を左右に移動するボーリングのピン。

霧に包まれたそれらがヒトの形をとり、それでも白人の天使ではなく、白衣に包まれた黄色人種だと気付いた時、和樹は自分がどこかの病室にいることに思い至った。

大きな枕にかえって不安な気持ちになり、首を動かすとズリズリと奇妙な感触が首元でする。頭に何か巻かれていると思いたたつて、右手でそれに触れようとしたが、注射針がテープで固定されていて動かすとまずそうだ。代わりに左手を動かそうとしたが、意識がはつきりするにともなうて、左肩に強い痛みを感じた。しかも、左腕に痛み以外の感覚がない。同じような激しい痛みは包帯を巻かれている頭の他に左腰にもある。

和樹の動きに看護師の一人が気付いて、医師が呼ばれた。看護師や医師の体がベッドに接触する度に、左肩と左腰にビリビリとした振動が伝わり、痛みとなつてダ

イレクトに神経に突っ込んで来る。医師の言葉は頭の包帯に遮られてよく聞き取れない。自分が置かれている状況を理解しつつある一方で、とにかく痛みを傷口にすり込まないよう遠ざかってくれとそればかりが頭を占めた。

どうも自分はとんでもない間違いを犯したらしい。

自殺をしたことではない——自殺に失敗したことだ——障害が残るかもしれない形で。

最後に見た竹林が思い出される。

医師が何かを言っているが、頭の包帯に邪魔されている上に、体が傷んで集中できない。看護師が鏡を持ってきて頭の前にかざしたとき、和樹は自分の状況を理解した。

大きな白タオルをかけられた体の、左足に相当する部分に膨らみがない——

左腕もギブスが嵌められていて全く動かないが、左足は大腿の途中で無くなっていた。

こんなはずではなかった――

在り来りだが、そんな後悔しか浮かんで来なかった。

「左腕は？ おれの左腕は？」

気がつくのと、ほとんど聴こえないのを構わずに、大声で口が叫んでいた。

左足はもう諦めないといけない。和樹の体力では、右足があっても車椅子生活だろう。

しかし、そうならば両腕がないと自分で生活できないのではないか？!

その恐怖がパニックを呼び込んだ。

「殺してくれ――左腕なしなら！」

そんなことを叫ぶ和樹に、パントマイムの医師が顔だけまじめに話しかける。口

では、お前みたいな役立たずには右腕だけで十分だろう、などと言われているかも知れないという疑心暗鬼が拍車をかけている。

これから、ご近所でも、イカレ野郎と蔑まれていきっていくのだ。息子の更に大きな枷となつて。

そんなのは耐えられない。だが、もはや自殺するだけの運動もできないのだ。

自分一人では、薬局に睡眠薬さえ買いに行けないだろう。

#### 第四章 再生移植医療モニター

「はじめまして。わたくしアントニオ・モレノといいます。杜都さん、聞こえますか？」

突如として耳に飛び込んできたくぐもった日本語で、そのエキゾチックな顔立ちの若い男は、ベッドの横から顔を出した。背広の上半身を和樹の体からなるべく遠ざけながらも、手を思い切り伸ばして和樹の頬に何かを押し当てている。アジア系の顔立ちにも関わらず鼻が高めで彫りの深い若い男が、まるでスペイン人のように名乗ったこと。さつきまで医師や看護師の声が全く聞き取れなかった閉鎖空間から解放されたこと。二つの出来事が同時に起こり、思わず痛みを忘れて和樹の意識は悪夢から浮かび上がった。

頬に押し付けられているのはイヤホンのようだった。そしてモレノなる男性が手にしているのはスマートフォンだ。そう言えば、スマホ用に骨伝導のイヤホンが発売されているというのを読んだことがある。これがそういう製品なのかは分からな

いが、少なくとも聞こえている原理は骨伝導に違いない。音質はくぐもっていてかなり悪いが、和樹にはその異国人の機転が救世主に思えた。

カラカラの喉から出にくい声を絞り出して、かろうじて医師との会話が成立した。全身麻酔手術の後のため、しばらくは絶食絶水でいてもらう。パラモーターで竹林に墜落したため、左足を大腿の途中から失った。竹林に墜落したことで命があったのは不幸中の幸いだという医師の口調は、暗にロケットモーターなんぞ使う基地外がというニュアンスを含んでいるようで冷たかった。左腕も骨折し、神経が切れたため回復の見込みはない。

一生、麻痺したままだろうとという宣告がなされた。

「お話させていただくことはできますか？ ああ、顎だけでお返事いただいで結構です」

医師からの通告が終わった後、モレノなる男性は、慎重に話かけてきた。一人に

してほしかったが、この男性がここにいる理由は知っておかなければならない。

「杜都様のこの度の事故をインターネットで知りまして、唐突でご迷惑かとも思いました。早いほうがいいと思い、お声をかけさせていただいている次第です。当社は日本の医療保険市場に新たに参入することになった、フィリピンに本拠地がありますモレノ・セグロ・レンタ・インバルシヨンMoreno Seguro Renta Inversionと申します。もちろん日本での本社は東京にあります。と言いましても、まだ本社しかない状態で、支店も営業所もまだこれからという状態なのですが。単にモレノ保険とだけお見知りおきください」

「どうやらこれは新手の外資系保険会社の営業トークのようだ。」

「杜都様が——言わば私どもの主催する宝くじに当たったことをお知らせに参りました」

何のことだ？

「あるいは、ご不幸コンテストに優勝したと言った方がいいのでしょうか？——日本では？」

口がカラカラにも関わらず吹き出しそうになった。

しかし、確かにそんなコンテストがあればノミネートしてしまうかもしれない。「収入がないこと、子一人片親の家庭、子に日本で解決しないが海外では解決するかもしれない健康問題があり、そして親が四肢の何れかを失ったこと——こういった基準で当社の契約モニターとして、杜都様がその一人にふさわしいと判断いたしました。杜都様のご事情は今回の事故について、掲示板スレッドから知りました」

「ご近所様か誰かがご丁寧にも書き込んでくださった結果、勝手にオーディションに受かってしまったタレントのようなものか。オーディションではなく不幸自慢大会なのだが。」

「こういった条件の親子に、契約モニターとしてフィリピンの医療水準を体験していただき、将来的に日本の医療制度にとらわれない医療保険を日本の富裕層向けに発売する足がかりとしたいのです」

日本の医療制度に国際的に見て制限が多いことは知っているが、フィリピンは医療水準が低いのではないか？ それにフィリピンで医療を受けたニューズなんて、フィリピン人からの渡航移植で日本でドナーが足りない腎臓を移植するということが一時期行われ問題になって、渡航移植は原則自粛するという国際協定が作られたの

ではなかったか？

「フィリピンの医師達は米国の大学を卒業した者が多く、全て英語で業務をこなすため、米国の基準で全ての医療が行われます。一言で言うと、米国並の品質の医療を、米国より安く提供できるのがフィリピンなのです。しかも、日本よりも圧倒的に自由度が高い。どこかの国で行われたあらゆる医療行為は全てフィリピンで実施自体は可能です。日本の医療制度の不足を補完する形で、特に移植といった大掛かりな手術だけをフィリピンで受ける形の契約を、日本で発売したいと考えています」

米国基準で医療が行われるというのは、確かにメリットに思える。

「倫理的な基準が日本や米国よりは緩いですが、私たちは渡航移植をモはやビジネスにしようというものではありません。いずれiPS細胞を利用した再生医療へと置き換わることを考えると、日本の技術で再生した臓器を使って、フィリピンは移植医療の経験と品質で勝負をするというのが、当社の方針なのです」

それで、日本人対象というわけか。営業対象としてだけでなく、再生医療技術の調査も兼ねての日本進出といったところだろうか。

「こう言うっては何ですが、お子様が日本で確定診断を得ようとするのは、もう無理

があるのではありませんか？ フィリピンでは確定診断できる範囲が最先端の米国並みに広いとお考えください。日本では極めて稀にしか出ませんが、先天性代謝異常症には実は、分類不能という区分が存在するのです。何らかの代謝系の異常値が検出されれば、とりあえずその方向で確定診断を出しておくということが可能なのです。医師さえ認めれば。フィリピンにはその程度の融通がきく医師も存在します。いったん、フィリピンで確定診断が出ると、確定診断という医療のシステムは世界共通のものですから、日本でも確定診断が出たものとして処方範囲が広がりますし、場合によっては特定疾患の医療費助成を申請することも可能となります——いかがですか？」

——これは、願ってもない！ グローバルな裏口入学を紹介された気分だが、うますぎるだけに、とんでもない落とし穴があるような予感が眉を曇らせる。

「ヒロキさんの確定診断が出た後、私達はフィリピンで可能な全ての治療を、無料モニターである杜都様親子にご提供しようと考えているわけではありませぬ。あくまで、当社が将来的に杜都様の再生移植医療に関係すると考えられる治療についてだけ、旅費、滞在費についても、すべて当社がお支払いいたします。ただ、杜都様

の場合には、将来的に再生移植医療に関係すると思われる範囲が、当社の基準で非常に広く、全ての外科手術が対象と考えております——二つの条件さえのんでいただければ」

親が四肢の何れかを失ったこと——というモレノの不吉な言葉が頭をかすめる。「一つは——今回失われた足の骨を、将来の骨折再生治療に備えて当社にご提供いただくことです」

意外な提案だが、理由付けをされてみれば、なるほどと思えた。この営業マンは足を失ったという事故の書き込みを読んで、処分されないうちにとかつ飛んできて、こうして怪我人に交渉中というわけだ。

「もう一つは——虫垂切除術を受けていただいて、将来虫垂炎で緊急手術が必要になるリスクを減らしていただきます。どのみち、ヒロキさんの確定診断でフィリピンを訪れていたただくわけですから、その時にフィリピンの外科医療を体験していただき、モニターとしての体験を早めの一つ報告にさせていただきたいのです」

この程度の要求は当然だと考えられる。今後、親子が受ける必要がある手術は、モレノ社を通してフィリピンで受ければ諸費用込みで無料にしてやると言われてい

るのだ。確定診断と引き換えで、早い段階で何かをやれと言われるのは、むしろ当然とも思える。向こうから見れば、確定診断だけ出させて契約を破棄するということもありうるわけだから。

——残りはただ一点の曇り。

「ヒロキも虫垂を……」潤いの失せた声で絞り出したのはそれだけだったが、異国からのセールスマンはイヤホンを当てる手の圧で反応した。

「連生型保険というものをご存知でしょうか？」

知っている。親についても確定診断が出ずに体調が悪化しているという状況では、告知義務の生じないうちに、かなり興味があり調べていた。

「親子で一つの保険に加入していただいて、親が死んでも子の方に保険契約が引き継がれていく、ということですよ。連生型の例として日本では、連生型生活保障保険という商品が、重度の疾患を抱えたお子様がおられる場合など、親の方の有利な健康状態によりお子様の健康状態のデメリットを緩和した上で、親が亡くなられた後もお子様が生活していくだけの最低限の生活費を保障するのに用いられています。商品の企画段階なので詳しくは申し上げられませんが、私どもも連生型の保険、し

かも新時代に対応すべく、親の遺伝子検査と病歴を子の疾病リスク評価に応用するようなものを目指しているのです。ヒロキさんの術前には確定診断と麻酔適応のための検査を入念に行いますから心配なさらなくてください」

めんどくさい説明を並べられたが、平たくと言うと、企業秘密ということだろう。釈然とはしないが、この話は地獄に仏のようなものだ。多少の不明瞭さはあっても、何としてもネットで検索して、可能な限りウラをとった上で加入したい。右手だけでも院内でも、スマホでフリック入力で検索はできる。

「ここに資料をお持ちしました。一週間、ご返事をお待ちしますから、ご一読いただけませんか？ 足の骨の方は医師の方に保存する旨、杜都様からお願いしていただけるとありがたいのですが？ 事故現場から一応病院に持ち込みましたが、放っておくともしかしたら処分されてしまうかもしれません」

どうしてもそれが重要らしい。さすが再生医療時代の保険会社。

だいたい、体から切り離された部位って、勝手に処分されてしまうようなものなのか？ グロ系FPSでいくらでも足を切断されたことはあったが、それがリアルで起こると処分の問題に発展するとは想像したことがなかった。確かに、医師に確認

しておいた方がいいのかもしれない。万が一にも、足が再生できる時代が自分が生きている間に来ないとも限らない。

どうでもいい想像を掻き立てられるほど、和樹の意識は乱れ始めていた。漠然としたリスクを匂わせながら興奮すべき提案をされたことで、術後の体に疲労が蓄積していた。

「日本での発売を見込んだ、モレノ社の再生移植医療モニター、ぜひ前向きにご検討ください」

それだけ聞こえると、頬に押しあてられているイヤホンの圧が、メラトニンの波間に霧散していく。

病室の窓の外には、雪が降っていた。

## 第五章 マニラへ

「当機は二ノイ・アキノ国際空港への最終の着陸態勢に入りました。これより先、電子機器のご使用はお控えください。座席のリクライニングとテーブルを元の位置にお戻しくください。お手洗いのご利用は、ご遠慮ください」

たぶん、そんなことを言われているのだろうと和樹は思ったが、機内のアナウンスは英語とタガログ語なので、おぼろげに英単語だけが頭に入ってくるだけだ。英語は、失業するまで職場で技術文書を読むのに、必要に迫られて使っていただけで、決して好きではなかった。妻の方は、彼が英語を好きで天扇堂DDの英単語ボキヤブラゲームで遊んでいたと思っていたらしく、そのことで度々からかわれたのが今は懐かしく思い出される。窓側の席に目を移すと、その妻の面影を目元に残すヒロキが、九歳の子供らしい高く細い寝息を立てている。

窓の外に目をやると、ライトブルーの翼の向こうに霞んで見える地上が、数十分

後には再び非日常的な光景の連続が始まることを思い起こさせる。空港での手続きはそう慣れてしているわけではなかった。それだけでも和樹にとつては非日常的と言えたが、こんな旅客機に乗るのは初めての経験だった。と言つても、機種が特殊という意味ではない。搭乗直後に強烈に感じ、今も和樹の左側にある通路を誰かが通る度に感じ続けているのは、得体の知れない、甘い、何かが熟れたような匂いだった。次に気付いたのは、日本の空港発の便であるにも関わらず、日本人よりも白人の方が多いことだった。もちろん、肌の色が日本人にしては濃い、フィリピン人と思われるアジア人が多かったが、白人が多いというのは予想外だった。道理で日本語のアナウンスがなく日本人らしきキャビン・アテンダントもないわけだ。後になって知ったことだが、米国からフィリピンへの便の中には、日本の空港を中継するものがあるそうだ。

これだけ日本語に不自由な機内では、ガイドのジョエルがいなければ、到底車椅子での搭乗などできなかつた。彼はモレノが手配してくれたガイド兼通訳で、マニラへの往復に渡つて、杜都親子を介助してくれるのだそうだ。モレノほど日本語は上手でないし美男子でもないが、浅黒い体はガツチリとしていて心強かつた。彼の

表情にはフィリピン人独特の日本人にはないハニカミがあつた。彼らは日本人のよ  
うに愛想笑いを続けたりしない。ちよつと笑つては続けて照れたようにして、彫り  
の深さが目立つ真面目な表情に戻る。モレノよりもジョエルの方がこの傾向は顕著  
だつた。

彼が日本の昼過ぎに和樹のアパートに来てくれた時、自分のことをジョエルとし  
てしか名乗らなかつたので、奇妙に思つて尋ねるとその答えはこうだつた。

「日本人とイツシヨで、フィリピン人には外国人は特別なのです。日本人だつて、  
指さしてよくガイジンガイジンつて言うでしょう？ サービスを受ける外国人に好印  
象を持つてもらふために、なるべくファーストネームを覚えてもらふのです。姓ま  
で覚えていただく必要はありませんし、第一私たちのフルネームは日本人が考えて  
いるより長いですよ。フィリピン人同士はニックネームで呼ぶことの方が多し、  
呼ぶときに独特の習慣があるので、私の姓を覚えてもシヨウがないです」  
よく分からなかつたが、冗談を交えず真面目に説明されてしまったので、もう彼  
の姓を覚えるのは諦めたのだ。

ジョエルは、搭乗口を経て搭乗ハッチ手前のボーディング・ブリッジまで和樹の

車椅子を押してくれ、搭乗ハッチの直前で和樹を置いて機内に入ったかと思うと、何かを抱えて戻って来て和樹の右手前に展開した。それは、座席付きのシニア・カートの似ているが、何となく観光バスの補助席を思い出させる、やたら幅の狭い車椅子だった。

「どうぞ。これがアイル・チエアらしいです」

「アイルーも喜ぶ甘いマタタビ」

その高い声に和樹が嘆息すると、ジョエルの後ろから、もそつと中二病男子が架空の剣を握りながら顔を出した。ヒロキはときどきふてくされながらも何とか自分で歩いてついてきていたのだ。重症の和樹を見たのがよほどシヨックだったらしく、ほとんど口をきかなかつたのが、旅客機に乗るという初めての経験に興奮して、ようやく平静に戻りつつあるのだ。興奮して平静に近くなるというのは皮肉な言い方だが、一昼夜にして重度身障者になった親を病院で目にした小学三年生の落ち込みは親本人以上だった。彼も旅客機の中の甘い匂いが気になるらしい。ジョエルは何を言われたのかあつけにとられていたが、すぐにそれを日本の漫才ネタか何かだと思つたようで、ヒロキのことを置いといて和樹へと視線を戻した。

彼も手順を知っているだけで、実際に使うのは初めてらしい。言われるままに手を借りて体を移すと、ジョエルは和樹が乗ったアイル・チェアを押しして搭乗ハッチをくぐり、左手にチケットを出して座席番号を確認しながらゆつくりと機内を進んでいく。ヒロキを窓側に座らせた後、和樹を席に移してアイル・チェアを片付けてくれた。その後、荷物の片付けをして以来、ジョエルは通路を挟んで和樹の反対側の席に座ってくれている。彼がいてくれることで、見知らぬ客が左足のない和樹を見る好機の目にも耐えられた。退院前、とりあえず装飾用の義足をとという和樹の安易な考えは打ち砕かれて、今は断端という切断箇所の安定を待たなければ、後で歩行訓練するための義足も付けられなくなると告げられた。そんなわけで、いやいや左足に何も付けないまま乗ることになったのだった。

旅客機が着陸態勢に入ったのに、ジョエルはどうでもいいらしく、右手を陽気にぶらぶらさせながら雑誌を読んでいる。しかし和樹の方は、丸い窓の端に映る初めてのフィリピンの大地が、予想と大きく異なる様さまなのに驚いて、思わず寝ているヒロキに上体を覆いかぶせて窓に顔を近づけてしまった。

地上には、海の深緑から海岸のアイボリーを経て常緑の草木へと繋がった直後、

白い箱が不規則ながらびっしりと地上に並んだ光景が、明るい南国の光の中で旅客機の後方へとゆつくりと流れている。何かと思つてよく見ていると、旅客機の高度が下がるにともない、その正体が和樹の頭の中で形を結び、その直後、見なければ良かったと後悔が湧き上がった。

もはや家とは呼べないほどのボロボロの小屋が眼下一面に広がっている。これが所謂、マニラが悪名を馳せているスラムというものなのだ。それにしてもなんと広大なエリアなのだろう。高度が下がった地上はものすごいスピードでスクロールしているが、スラムは途切れながらもまだ続いている。これほどの貧困人口がどのようにしてこのエリアに固まってしまうのか理解できない頭で考えようとしている間に、地表はますます勢いを増し、滑走路のグレーに入ったところで和樹はようやく視線を剥がすことができた。一旦深呼吸した時、一瞬ジェットエンジンの音が高くなつて車輪が地上に接触したことを示す振動がやつてきた。

タッチダウンしてから深呼吸するのではなく、タッチダウンする前に深呼吸してしまつた皮肉にうすく苦笑いしながら、和樹はジョエルに助けを求める視線を送つて、ヒロキを起こしにかかった。

ご不幸コンテストの優勝者は日本人ではないだろう。

——しかしノミネートは毎年大きく変わるかもしれない。スラムで重度身障者となつたら一年生き延びないかもしれない。

## 第六章 最初のお仕事

マカティ市の市街にあるモレノ社の契約病院は、そこに着くまでの経路が南国の発展途上国的な雑騒とした雰囲気であつたのとは対照的に、美しく近代的な外観を呈していた。ある種、未来的と言いかえてもいいかもしれない。金融街と言われるマカティ市へと入つてからましになつたとは言え、依然として雑然とした雰囲気の街の中に、天まで届くかと思われる勢いで、限られた数の超高層ビルが立ち並んでいる。それらの超高層ビルが建っている整然としたエリアの一角に、その病院はあつた。

地上十五階建て、病床数六〇〇を誇る聖十字国際病院には、日本の大病院に存在する何百人も収容できるかと思わるような患者待ち用のホールがなかった。誇らしげな病院名のロゴ、いくぶん派手な装飾、オフィスビル然とした空間。それらはモレノが「富裕層のための医療保険」を日本で発売しようとしていることの意味を説明していた。この国では優れた医療は金持ちを対象としたビジネスなのだ。たまに

偽善的な雰囲気をかもしだしながらも、我々に平等な医療を約束してくれるボランテニアではない。

待ち行列のない快適な入院手続きを終えて、杜都親子だけの病室に入った。ジョエルがナース・ステーションから戻ってくると、一時間以内に医師が病室を訪れるという。二十分余りでやって来たのは、笑顔の明るい丸顔の南国女性だった。年の頃は四十五ぐらいか。少し中年太りと見えるが、美人と言える範囲に入るだろう。彼女は和樹の顔を見るや、ニコツとして握手を求めてきた。まず医師から患者に握手というのにびっくりだ。これがフィリピン流なのかと驚いてジョエルを見ると、彼も目を大きくして言葉を探している様子。とりあえず彼女の早口の英語を訳しながら、フィリピン人医師と日本人患者の文化的仲立ちに必死だ。

「こちらがマリセル・サントス先生です。外科医で、杜都さんとお子さんの虫垂切除術を担当します。よろしくお願いします（と、なぜか握手で済みますサントス医師の代わりに日本語を担当するジョエルが頭を下げる）。術前説明なのですが、虫垂切除と同時に、一度の開腹でカルシウム・インプラントの埋め込みも行います」

そこまで言つてジョエルはサントス医師の説明をはつしよつたことに気付いて彼の言葉で付け加える。

「サントス先生は、フィリピン大の出身で米国の医科大学にフェローとして留学された経験があります。フィリピン大は日本の東京大学に相当する：と説明を受けました」

要するにエリート中のエリートだということだ。それは分かったが、もう一つ説明をはしよつたように聞こえたはずだ。

「その——カルシウム・インプラントとは——？」

和樹の質問に、ジョエルが再度サントス医師の方を向き直り説明を求めると、彼女は白衣の裾から出た片足へと体重を移し、両手を互いに反対側の脇へと入れて、ちよつと困つた、といった仕草をした。平たく言えば、だらし無い腕組みだ。強調された女性の胸に和樹は思わず視線を泳がせる。

「失礼しました。すでにモレノから説明したものと思つていましたので。複雑骨折治療用のカルシウムでできたインプラントです。歯科で用いられているのと同じ素材ですから、ご安心ください。将来、杜都様が複雑骨折を起こした時に、杜都様の

体になじませておいたこの素材が役立つはずです。歯科治療が体になじむのと同じ理屈です。契約書にも記載があつたと思うのですが——」

また骨折対策か。念の入つたことだ。発がん性について検証途上のRFIDタグやらチップやらを勝手に埋め込まれるのと同様に比べれば、骨折対策のカルシウムとは受け入れ可能な範囲かもしれない。政府の陰謀として電波に騒ぎ立て、確定診断のチャンスを棒に振るほどのこともないだろう。

和樹は自己満足な親ごころを理由にして多少の不満を呑み込むことにする。そこには息子をおいて自殺しようとしたことへの後悔があるのかもしれない。左腕に残る痛みが、骨折というサントス医師の説明を補強しているのかもしれない。

彼女の説明は続き、具体的に手術時刻の話になつた。今日明日で、血液検査とレントゲン撮影、ヒロキの確定診断のための検査を行なつて結果に問題なければ、明日の午前十一時から手術室の一つが開くので、その時間にヒロキと和樹の二人連続して同じ手術室で手術を行うのだという。ここまで来て、そのぐらいのことで手術を中止にする気はさらさらなのだが、日本から航空機でやってきたこととのコ

スト的な不一致を感じたので、かなり控えめに疑問を口にしてみる。

「だけどそれは、危険ではないのですか？ コストのために二人、同時に手術だなんて……」

「手術室の都合で二人同時の時間しかあいていないのです」

サントス医師は笑顔を交えて言うが、和樹にはジョエルが困った顔になったような気がしてならない。通訳してくれる彼の表情から、この女医が原語で言っていることのニュアンスを推測するしかない状況は、和樹を疑心暗鬼な気分にする。

“It’s a piece of cake, just an appendectomy”

かろうじて、彼女がこれは単なる虫垂切除術だと主張しているのが、最後の単語だけ聞き取れたので分かった。ドクターハウスを字幕で見といてよかった。そこで、ジョエルを通じて邪推しないといけない状況を打破すべく、なんとか知っている言葉だけ並べて、移植手術のように二人同時に手術する必要はないと伝えてみる。

“But this is not a transplantation…”

勇気を出して口にしたたどたどしい英文だ。和樹にとっては何となくそういう言い回しになったにすぎなかったのだが、サントス医師の方はこれに機敏に反応した。

真顔になって白衣の裾を翻して病室を出て行ったかと思うと、廊下に留まってスマホをかけている。日本と違って院内では専用のPHSでないといけなわけではないらしい。

しばらくして戻ってきた彼女は、再び笑顔になってジョエルを通して言った。

「実は、私達が何を気にしているかといいますと、将来、ヒロキさんの病状が悪化し、和樹さんの臓器を移植する必要が生じたときのために、予備試験をするためにこの手順でなければならぬのです……」

——何かあると思っていた。やっぱりそういうことか。病気の子に重度身障者の親、そんな不遇の組み合わせに対してやたら熱心な保険会社。

「これは、杜都さん親子にとって、大変有利な条件なのです。人工臓器よりも臓器移植の方が成功率が高く、コストも安いのです。しかも親子の場合の移植は拒絶反応リスクが低くなりますから」

和樹が深呼吸する間にも説明は続く。

「今回、そのための予備検査をしておきたいのです。そのために、ヒロキさんから先に手術をして、なるべく間を開けずに和樹さんの手術を行いたいです。息子さ

んの疾患が何かは判明していませんが、先天性代謝異常症を疑う限りは肝臓か膵臓に問題があるのかもしれない。お父さんの肝臓をほんのわずかだけ生検して移植し、お父さんの肝臓が息子さんへの移植に適合する見込みがあるかどうか、今回の手術で適合性確認ができるかもしれない」

和樹は自分達親子の暗い将来を想像してうなだれたが、少し考えてから下を向いたまま言った。

「確かにそれがベストの方法です。よろしくお願いします」

## 第七章 忘れられた疑問

「糸は一週間したら、日本のご近所の病院で抜いてください。この手紙を持っていけば分かるはずですから」

英語の手紙を持って行って分かってもらえるのかどうか心配だが、大病院なら大丈夫だろう。若い女性看護師がその説明を残して、ジョエルが訳し終わるのを待たずにそそくさと次の仕事に向かうのを見届けた。

支払いはモレノ社持ちなので、病院の一階で手続きする必要はないという。ただ何時何分に病室を離れたのか管理上はつきりさせておく必要があるのです、ナースステーションでの本人確認はしなくてはならない。和樹が自分の方から先に手続きしようとする、ファイルの都合上やりにくから先に手術したヒロキの方から本人確認をしたいと言われて、仕方なくまだ病室に残っているヒロキをジョエルに呼びに行ってもらった。これからは父親が重度身障者の父子家庭だ。可能な限り子供本人にやらせなくてはならない。

ナースステーションの前だけだっぴろくなつた廊下で、ぽつんと車椅子に座つたまま手持ちぶたさになつた和樹は、今回の入院を振り返りながら、ふと疑問を思いついた。

あれ？ 何でヒロキの方が先に手術したんだ？ ヒロキへの移植の適合性検査なら、俺の方の組織を先に取つて、ヒロキにほんのわずか移植してみるということではなかつたのか？ なんてヒロキの方が先に手術したんだ？

「チャイナチャイナ♪ パパ、日本語だと駄目かもつて言われた」

ヒロキが面倒くさそうな仕草で前に出した右足に手をしなだれているので、色っぽいドレスが何で日本語と関係あるのかと思つたが、和樹の訝しんだ目にヒロキがとまどいを見せたとき、それがChinese Characterから来ているらしいと気付いた。退院の手続きをしてくれた看護師がヒロキに漢字のサインでは上司に確認をとらなはいといけないと言つたのを、ジョエルが日本語では駄目だとヒロキに説明し、ヒロキの説明の中で結びついたので。

子供を連れてた外国語での病院手続きの面倒くささに嘆息しながら、看護師がナーステーションから廊下に出てきて和樹に書類を見せるために屈みこむのを申し訳なく思う間に、和樹の中でさつき抱いた疑問は遠いものとなつていった。

## 第八章 インスリノーマ

ゾロえもんの目がこれほどいびつだと思ったことはかつてなかった。黒で塗り固められ、媚びるようにほんの少しだけ楕円を帯びたその目は、まるで何を考えているのか分からない。診察室の壁にかかったカレンダーに描かれているものだ。ここは小児科。しかしヒロキはいっしょに来ていない。

医師が画面上で検査結果を読むのにマウスをクリックする手が無性に気になる。その女々しい手つきはなんなのだ。医者の手つてのは肝心な時に差し掛かると女々しくなるものなのだろうか？ 獅胆鷹目なんて気取ってもあんた外科じゃないだろ？ それとも、テメエの女の胸もそんな感じで揉んでるから、そんないやらしい仕草になるのか？ なんでスクロールホイールを人差し指じゃなくて中指を右ボタンから移して回そうとするんだよ。しかもホイールにそつと添えるだけで、回さずに結局ス

クロールバーのノブをドラッグしてやがる。熱中するとそれやっちゃうんだよな。テメエの女の乳首も中指でイカせるクチなのか？ ヒロキの結果を報告するって肝心な時に、そんな不謹慎な持ち方すんじゃないやネエよ。

「検査結果のことですが、お子さんの臍島に腫瘍がある——ということになってしまいました」

画面を向いたまま不意に医師が発したその言葉で、一瞬にして診察室の情景は冴え渡り、和樹は現実世界に呼び戻された。知らず知らずのうちに、肝心なところで待たせる医師への敵意を頭の中で言葉にしていたのだ。医師の言葉のトーンは押し殺されていて、画面を向いたまま話し始めたのは、伝えるのが苦しいせいかもしれない。

「しかし、検査前にもお伝えしましたように、これはインスリノーマと言う九割がタ良性の腫瘍で、臍癌の中では特に進行が遅いことが知られています」と言うのは、安西六郎医師。年の頃は和樹と同じと見えて、子供がいてもおかしくはない。小児科医の平均年齢は少し若いと読んだことがあるから、この歳で重要な告知をする立場なのかもしれない。それとも、フィリピンの医師との連絡が面倒臭

がられて、もつと年齢が上の医師は担当してくれなかったのだろうか？ そんな邪推を今からしても仕方がない。

「前回の血管造影では影なのかどうかはつきりとは分からなかったのですが、三ヶ月開けて撮影した今回は、これがインスリノーマの影だと断定できます。わずかですが大きくなっています」

安西は、黙ったままの和樹の目をまっすぐに見て、再度確認するように最初から説明する。

「大変心苦しいのですが、お子さんのインスリノーマは成長しています。インスリノーマというのは膵癌にしては非常に進行が遅く、しかも良性的のことが多いのですが、お子さんのものは大きくなっています。悪性のものかもしれない」

スイガンという忌まわしい響きが頭の中でこだまし、和樹はぶっきれた。癌の中でも五年生存率が5%と最も低い種類の癌だ。

「もう少し早く検査していただくことはできなかったんでしょうか?」

「いえ、ですから、それは、フィリピンでお受けになった検査でも、アミノ酸分画とタンデムマス検査から何らかの先天性代謝異常症の一種であろうということ、

確定診断が出たということでしたよね。実際、私も軽度のミトコンドリア病の可能性はあると思います。日本では軽度のミトコンドリア病に対して確定診断は出ませんが、広い意味ではそれも先天性代謝異常症です。だから、その裏でもう一つ進行性の疾患が隠れているというのは疑いませんでした。ミトコンドリア病による糖尿病様の症状をインスリノーマによるインスリン分泌過多がバランスさせてしまつて無症状であつたのかもれません。もし先天性代謝異常症との確定診断がなければ、早い段階で広い範囲で検査していたかもしれませぬ」

何たる皮肉。確定診断を出すことを目的としてフィリピンに行き、分類不能という条件付きだが、先天性代謝異常症との確定診断は出た。しかし、そのために却つて進行性の疾患を見逃した可能性があると、今、医師の側から指摘されているのだ。確定診断が出た時には、日本の医療をしてやつたりと思つたものだが、今やその立場は完全に逆転してしまつた。

「インスリノーマは通常は核部のみの切除手術で対処するところですが、前回と今回の像では成長していることがうかがわれます。近年になつて主に撮像分解能の向上で、こうした三ミリメートルに満たない影でもインスリノーマだと断定できるよ

うになりました。小児のインスリノーマの学術報告は少なく、それは成人する過程で一定以上の大きさにならないので撮像できなくて、しかも悪性化も稀なのではないかと楽観視する説もあります。しかし、生命のリスクを考えると、成長しているインスリノーマは悪性のものと見做し、転移のリスクを考えるとなるべく大きな範囲で切除するのがよいということになっています。幸い、脾臓と肝臓からは距離があるので、そちらは考えずに、膵臓の範囲でなるべく大きく、ということになりますか」

「だけど、そんなことをしたら膵臓の機能が落ちるのではないですか……？」  
恐る恐る尋ねる和樹に、安西はわざと訝しがるように、キーボードに向かってお辞儀をするような仕草で言った。

「いったい、どこまでお聞きになつていますか？ フィリピンのサントス医師と先天性代謝異常症のことで連絡をとるようにとのことだったので、メールでやり取りしたところ、お父様からの膵臓移植という線で施術可能との答えが返ってきました。まさか、向こうで勝手に移植の適合性を検討したわけではないでしょう？」

——適合性確認とは、まさにこのときのためのものだったのか  
という感嘆と、

——あれは肝移植に対するものであつたはずだ

という疑問が同時に沸き上がつて来て、和樹はサントス医師の丸い顔を思い浮かべたが、その顔が意地悪そうに笑っているのか、和樹の疑心暗鬼を不服に感じているのかは見えなかつた。

いずれにせよ、和樹の膵臓の半分を切り取つて、全摘出したヒロキに移植するということだつた。ともかく、フィリピンでの移植適合性の確認は、先見の明があつたということになる。今はそれしか言えない。相手は膵癌なのだ。文句をつけて時間を失っている場合ではない。

## 第九章 ドナドナ

「ドナドナ ドーナナ 子牛を乗せて〜♪

ドナドナ ドオーナナ 荷馬車はゆれる〜♪」

点滴を付けたまま広めのストレッチャーで運ばれながら、一見するとヒロキは陽気に歌っているが、もしかすると強がっているのかもしれない。遅れてストレッチャーで運ばれる和樹は、周りのスタッフが怒り出さないかと気が気でなかった。歌いやすい響きがあるが、実は二番の歌詞で牛を屠殺場に送る歌なのだ。幸いスタッフの何人かが目で面白そうに合図を交わし、日本語とは違う機関銃のような会話が續いていた。日本語の悲しい歌詞とタガログ語の歌詞にはニュアンスの違いがあるのかもしれない。皆がマスクをかけているため顔が見えず、日本の田舎の病院で方言を話す看護師に囲まれるとこんな感じなのだろう。

それにしても、ヒロキはこの歌詞の意味を分かってるのだろうか？ と思うと、涙が出てきた。なんで俺たち親子ばかりこんな目にとっってはみるが、癌で命を落と

す患者は数え切れないほどいるはずだ。

幾重もの銀板が左右に分かれて、ストレッチャーが通過した先に和樹が見たのは、かつて工学を学んだ和樹が所属していた大学の実験室のような空間だった。ただ、そこに立ち並ぶ人々の出で立ちは極度に衛生的で、それは細菌の汚染を阻むと同時に異国人である和樹をも阻むように思われた。横に立った看護師が和樹の方をじつと見たまま、リモコンのスイッチでも入れるかのように手元だけの動きでシリンダーを押し込むと、和樹の意識は無影燈の光の中に溶けていった。

膵臓移植手術は成功し、和樹から切除した膵臓の膵尾部側の半分は、膵臓を全摘したヒロキに生着した。今後ヒロキは感染症のリスクに悩まされながら一生、免疫抑制剤を服用し続けなくてはならない。しかし、親子移植なので一割ぐらいは他人からの移植よりも感染症のリスクが少ないはずとのことだった。和樹の方も、膵臓からの膵液やインスリンの分泌が半分になってしまったため、体調悪化がみられたが、もはや体の具合が悪いのは慣れっこだった。それよりも出来の悪い親としては、大きな仕事を一つ果たした気になった。たとえば、自己満足であつたとしても、その

ことは和樹を安心させた。

疑問に思った適合性確認の件は、サントス医師によると、主に遺伝子検査の情報で膵臓の適合性を弾き出したとのことだった。虫垂切除のついでに行った、和樹からヒロキへの肝臓の適合性確認の検査は、やはり肝臓についてだけのものだった。膵臓は肝臓と比較して血流が少ないため、膵臓の適合性の検討はそこまで重要ではないという答えだった。

どことなく納得の行かなさの間にふと思い出したのは、あの退院前のナースステーションでの小さな疑問だった。

——なんで、虫垂切除術の時、ヒロキの方が先に手術をしたのだろうか？

## 第十章 転移

「リンパ節に腫脹がみられ、マーカールが上昇しています」

安西医師のその言葉に、ピトピトピトと雨音が続く。診察室で彼の向こうに見える窓には、透過にされたブラインド越しに暗い緑が映っている。

それは、転移という宣告。

移植という大手術で浮かび上がった生に対する、更に深い奈落。

「と言つても、今のところ、このリンパ腫は大きくはなつていません」

安西は口元を引き締めて続ける。安心材料を提供してバランスを取ったつもりか。

「ですが、それも時間の問題です」

和樹の恐れている一言が出た。

「ガンに対する免疫力を取り戻すため、なるべく早い時期に移植臍のために投与している免疫抑制剤を中止しなくてはなりません」

そして最後に、付けるに早すぎる一言を付け加えた。

「申し訳ございません」

項垂れながら一度息を大きく吸い込み、そしてゆつくりと吐いた和樹の足元から闇が広がり、安西と診察室を呑み込んだ。

できることなら悪い夢だと思いたい。

移植臍が拒絶反応を起こすリスクを選ぶか、転移したリンパ腫が成長するリスクを選ぶか――

どっちを選んだとしてもヒロキの余命はそれで決まるという。

あと三年か、長くて十年か。

何年生きられるかということに、一体どんな価値があるんだろう？

ヒロキが長く生きたからと言って、残りの人生を親の介護のために費やしてしま

うリスクだってあるのだ。

そんな人生を親子で過ごすということは、互いの人間性そのものに変容を与えるだろう。

ヒトは自分で変わらなれないと思っっているほど強くない。

できることなら、彼に自由な人生を残してやりたいが、自分が自殺したならその意味をヒロキはすぐに理解できる年齢に差し掛かっている。

その選択肢はもはやない。

親が死ぬのは仕方がない。

それは自然の摂理というものだ。

しかし、子が先に死ぬなら、親の生というものはいったい何だったのだ？

ヒロキが親にならずに死ぬということは、俺と妻が生きた証も、すべて幻に化そうとしているのだろうか？

それとも、単純にヒロキの余命を悲しまず、そんな生物学的原理に基いて分析するほど、俺は狂い始めているのだろうか？

遠くで安西が咳き込む音がする。そのわざとらしい響きに和樹の中に広がった冷たい世界は一気に燃え上がり、失望は怒りに変わった。

何をわざとらしく悲劇のヒロイン演じてんだ。

そういうのはカマ掘り合った奴らでBLの中だけでやってくれ。

この世は交通事故と自殺だらけ。時には殺人だって起こってる。それに比べればガンなんて悲劇ではない。

いや、悲惨さと悲劇とは違う。ガンは悲しむだけの時間があるから悲劇たりうるのだ。

ガンの悲劇は所詮、「劇」。それは悲しむべきことではあるけれども、それで完結する。

しかし世の中には完結することのない悲劇というものが存在する。

多くは親が子を作った後、発症する。しかしその時には子には優性遺伝で五十パ

ーセントの確率で病気が遺伝している。しかも、子の方が親よりも重度で発症するのだ。親は子が発症するのを、自らの発症から二、三十年経て衰弱し、死んでいくまで眺めている。しばしば、子が親より早く亡くなるそうだ。

表現促進という現象を伴う筋緊張性ジストロフィという病は、その極度に悲劇的な結末の割には、日本でろくな扱われ方をして来なかつた。患者数が少ない希少疾患はガンなどの大衆病より冷遇されている。

この疾患の場合は、表現促進という一クラス上の悲劇が追加される——にも関わらずである。

近代医学に基づく重症度というのは個体が全てで、親子として見た深刻さが重要なことは理解されていない。

それに比べれば、ガンによる悲劇など個人の範囲になんとか収まっている。

今のヒロキと自分をめぐる悲劇は、果たしてこれらに見て見ぬふりをしてきた報いなのだろうか？

ガンの悲劇など大したことはないから、ヒロキに潔く病氣と戦えと叱咤すべきな

の  
だ  
ろ  
う  
か  
？

## 第十一章 思いがけない電話―とんでもない提案

診察室を覆っていた闇が和樹の足元へと収束し、雨音の響きで周囲への注意が研ぎ澄まされた。雨音に混じって聞こえてくるのは、聞きなれない安西の声だ。まるで外国語の様。まだ自分が現実の世界に戻っていないのかと思い、顎を上げたその先には、パソコンのモニターに向かって頭を掻く姿があつた。

安西が左手に持っているのはアイボリーの受話器だ。安西の含み笑うような仕草といっしょに、隠そうともせず和樹の目に入ってしまった受話器の白さは、和樹の中に赤いものをたぎらせた。

何、電話してんだ、コノカスガ!!

さっきまで俺の息子の生死を話してんじゃねエのか!!!

和樹が右手を振り上げて叫ぼうとしたその時、急に顔をコチラに向けた安西が、

和樹の怒りの表情にたじろぎながら言った。

「日本語でオーケーだそうです。フィリピンと繋がっています」

そう言いながら、一瞬苦虫を噛み潰すような顔をして、受話器を和樹の方に近付けようとする。電話機を手で持って支えても車椅子の和樹まで長さが足りない気付いて、自分で車椅子の後ろに回って和樹を受話器の方に近付ける。前に押されながら、なんで看護師を呼ばないんだと目を泳がせながら訝しんだその時、安西が耳打ちした。

「当院から連絡をとったわけではなく、あくまで向こうから強く求められたことをお忘れなく——」

受け取った受話器から聴こえてきたのは、妙なトーンの年配の女性の声だった。

「実は、ヒロキさんをお救いできる方法がヒトツだけあります」

この女は一体誰だと思っただが、与えられた希望に半信半疑ながら驚いて、和樹は話を続けさせた。

「どういうことですか？」

「あ、失礼しました。つい興奮してしまつて。私一昨年にパン：スイゾウの移植を担当しましたマリセル・サントスです」

名乗られてても、それがサントス医師のことであることに思い至るまで一呼吸の時間がかかった。彼女が日本語が話せるということがおかしい。まさかガン患者を狙つたナリスマシ詐欺ではあるまいな？ しかし、その疑いは次の言葉で打ち消される。

「こんなときに申し上げることになつてしまふのは心苦しいのですが、インプラントのことを覚えておられますか？ アペン：虫垂切除術の時に埋め込んだカルシウム・インプラントです。将来の複雑骨折治療用とご説明した」

「それがどうしたんです？ だいたい、日本語は話せなかつたはずではなかつたのですか？」

慇懃な響きを強調して和樹は答えた。汗が滲んだ右手に受話器が重い。

「実は日本の京都大学で研究をしていた時期があつて、ある程度は話せたのですが、患者に正確に情報を伝えられるほどではなかつたのです。ですが、カルシウム・イ

インプラントの件で昨年、もう一度日本を訪れていましたので、その間に上達したみたいですよ」

なんとなく、その話し方には何か楽しいものでも見つけたかのような響きが感じられる。

「端的に申しますと、カルシウム・インプラントに再生医療を導入して、ヒロキさんの膵臓を再生できないか——という可能性を検討しています」

その言葉に和樹の右肩が跳ね上がったて、受話器が耳からずれて音が遠くなる。

「すみません。もう一度お願いします」

「えっと、ヒロキさんの膵臓を再生医療で作りませんかという……ゴテイアンです」

「再生医療って、カルシウム・インプラントは複雑骨折の際に骨を再生させるためだけの、膵臓とは関係ないものですよ？ 骨折したときに体に馴染んだカルシウム・インプラントを取り出して、実験室で骨を再生させるとかい……」

「もちろんそれもありますが、もっと汎用的な再生医療に使うことを、カルシウム・インプラントは想定しているのです。膵臓の再生もその一つです」

「カルシウム・インプラントを取り出したら、実験室で膵臓が再生できたりするも

のなのですか？」

「今回は実験室ではなく、体内で臍臓を再生させるといふことのゴテイアンなのです」

「はあッ?!」

和樹は馬鹿にしたかのようにサントスの言葉を弾いた。即席で誰かに吹きこまれたようなゴテイアンという言い回しの怪しさもあつたかもしれない。

「カルシウム・インプラントは、生体外では再生できない臓器をヒトの生体内で再生させるための世界最初のデバイスなのです」

和樹が思わず助けを求めて安西の方に頭を向けると、オフィス・チェアに座つた彼は学会誌か何かを読んでいた目を上げた。仕方なさそうに机の上に置いてあつた書類を、和樹の揃えた大腿の上に置いた。左側の大腿には義足が嵌っている。

「サントス先生が言っているのは、こういうことです」

安西は和樹の手から受話器を取り、代わりに電話機本体のボタンを押してスピーカーホンに切り替えた。

「この工程図の手順で、一昨年の膵移植手術で半分の長さになったお父さんの膵臓に継ぎ足す形で、元の長さになる方向でお子さんの膵臓を再生するそうです」

「ちよつと待ってください。ヒロキの膵臓を再生するんですよね？」

「そうです」「はい」とサントスと安西。

「リンパ節へと転移したガンを小さくするために免疫が必要だから、免疫抑制剤を切っても拒絶反応が起こらないよう、私からの移植膵を再生した膵臓で置き換えるために」

「その通りです」

「しかし、それだと、ヒロキの体内で移植膵に継ぎ足す形で再生させるといふのは、同時にリンパ腫への化学療法や放射線療法も行わなければならないので、負荷が大きすぎるのではないでしょうか……？」

和樹はごく自然な疑問を口にしただけのつもりだった。しかし、安西は大げさにかぶりをふって黙ってしまった。サントス医師の方も返事がない。何かシビアな質問をしたのかもしれないと気付いたが、二人の沈黙の意味が分からない。ひたすら言葉を待つと、十秒経ってサントス医師が答えた。

「再生膜はヒロキさんの体内で形成するものではありません。お父さんの体内で形成するという——ゴテイアンなのです」

「——!!」

和樹の声にならない声に、サントス医師が応じる。

「お父様の方で気づいて下さったので、私も説明が楽になりました。ヒロキさんに今すぐ必要なのは化学療法と放射線療法です。その状態で負担の大きな手順を同時に進めることはできません」

息を止めた和樹の返事を待たず、彼女は続ける。

「さらに再生中の膵臓にリンパ腫から戻り転移が起こる恐れもあります。元は膵臓のガン細胞だったわけですから、他の臓器に転移するよりも膵臓へと戻る方が容易でしょう。それに対して、お父さんの方は移植膵もガン細胞もありませんから、免疫抑制剤を再生膵の都合に合わせて投与することができます——もちろん、この計画にご同意イタダケレバ、の話ですが」

彼女の真摯な声とは裏腹に、安西の方は、何かモノを探すような動作で話題から

自分を切り離そうとしている。

なんなんだ——なんなんだ——なんなんだ

俺の中でヒロキの臓器を作る?!

息子とは言え別の人間だぞ!!

そこまでの異物を俺が体に取り込むのか?!

臍臓の半分を提供した上に?!

——だけど、それしか——ヒロキは助からない?!

「この技術のことを、同種内臓器製造、シー、オー、エフ、すなわちコフと呼んでいます」

そう言われて情報を探すと、膝の上で冷たい汗に濡れて中央で折れ曲がった工程表に、COF: Conspicues Organ Fabricationと記載がある。

「ディスク状のカルシウム・インプラントは、膵臓の中心を通っている膵管という管を中心にして、膵臓の前半分、つまり膵頭部から、移植で切除された膵尾部に向けて膵臓を延長するために最適な形状をしています」

スピーカーの声は誇らしげに宣言する。

「移植ドナーとなった時の切断面に貼り付いたディスクは、膵臓の尾側へと物理的なテンションをかけて引き付けられながら、再生中の膵臓をほんのわずかずつ延長していきます」

膵臓をハムに見立てると、ちょうど薄切りにするのは逆に継ぎ足すのだなと理解したが、そんな不謹慎な例えがこの会話に挿入されていていいのかどうか分からない。なにしろ、対象はハムではなく、生きた臓器なのだ。

「ディスクが貼り付いた面では、カテーテルからわずかずつヒロキさんの膵臓細胞とiPS由来細胞が混合されて供給されます。テンションによりほんの僅かできた微細な破壊面に、創傷被覆材が怪我を埋めるようにして膵臓細胞が供給され、生着していきます」

3Dプリンタで言うと、生の膵臓を二次元の印刷パターンとして用いて、カテー

テル臍臓細胞をインクとして使うという意味だと理解したが、単に造形のためだけの3Dプリンタとはわけが違う。さながら超高級3Dプリンタ内蔵人間というわけだ。

「破壊面を限定するために、ディスクの面上では同心円と中心線で区切られた扇形の一ブロックに限って、さらにテンションを加えることができます」

「できます」という言い方が、COFなる技術が実施経験の極めて少ないものであることを裏付けている。すでに手順が確立されているなら「加えます」と言うはずだ。

「中心に近いブロックほどほんのわずか臍尾方向に飛び出した形状になっているので、イメージとしては、先に臍管を作って、後からその外側に臍臓本体を肉付けし、パームクーヘンのように同心の外側へと厚みを加えていきます」

「ば、パームクーヘンだと?!」

「いえ、その、日本では違う名称かもしれませんが。ドイツのケーキ菓子のことです」  
自分の臍臓の例えとして問題を感じた和樹だが、悪びれずに補足するサントス医師に肩を落とした。

「えっと、よろしいでしょうか？——カルシウム・インプラントという名称は機能を表していませんから、COFではより正確な名称で呼ばれます。アイ、エス、ビ—— Implant Scaffold Bridgeという名称は、製造を受け持つ装置であるインプラントと、再生される臓器が形成される足場、スキヤフォールドである移植切断面とを仲立ちするもの、ブリッジという役割にちなんだものです」

「どんなたいそうな名前が付いても、そういったインプラントをじゃんじゃん入れるのが杜都さんの体にとって異物であることには変わりない」  
関わりたくなさそうにしていた安西だったが、見ていられなくなったのか和樹の気持ちを代弁してくれた。

「いづれご説明しなければならぬと思っていました。カルシウム・インプラント——正式にはISBというデバイスは、杜都さんの体にとって異物ではアリマセン」  
サントス医師は前置きをしてから言った。

「杜都さんが事故で切断された左大腿の骨を、ディスク状に切り出したものなので  
す」

カルシウムという素材しか表していない奇妙な名称に隠れていた真実が、露わになつた瞬間だつた。

「体に慣らせて I S B として使う太い骨を保存するために、自家組織移植を行ったものです。だから、異物ではないのです。インプラントという名称さえ便宜上のものでした。移植片なのですから」

呆然とする和樹の表情は、電話の向こうの彼女には伝わらない。

「I S B の素材として、自分の組織を用いることで移植切断面から剥がれにくい、テンションに耐えられる強固な接合を実現します。インプラントとスキャフォールドの間をブリッジするというのは、このデバイスの機能を表していますが、もう一つこのデバイスの構成をも表しているのです。スキャフォールドというのは、再生を開始するための生体としての足場という意味です。つまり、インプラントと生体の中間として、人工物と生体の間という意味合いがあります。このデバイスが人工のインプラントとは違って、杜都さんの骨を加工した改造組織とも呼ぶべき、素材

としても人工物と生体組織の中間の存在だからです」

彼女の誇らしげな声は、もはや半分も和樹の耳には届かなかった。

なんということ——!!

何かおかしいと思っていたのだ。

報道された重傷者を探して無料モニターをアピールしてきたなんて——!!

コイツラは太い骨とその持ち主の体が欲しかったのか——!!

「もう十分だ!!」

和樹はあんぐりと口を開けたままの安西を残して、ドアの縁に電動車椅子の車輪をぶつけながら、モーターを唸らせて診察室を飛び出した。

「予定よりずいぶん早いじゃありませんか？」

残された安西が仕方なさそうに言うと、スピーカーから魔女の声が答えた。

“I just saved our time to save his son's life...”

セイブセイブとはうまいことを言う——私は人命のために時間を節約しただけです、か。

終劇した診察室に雨の音だけが響いている——

## 第十三章 パパの妊娠

「ヒロキ、パパが妊娠したらどうする？」

「別にいいんじゃない？ パタリロのマライヒみたいで」

状況が深刻なだけに冗談ぽく尋ねたつもりが、思いもよらない知識で冗談を返されて和樹は怯んだ。相手の方が一枚上手だった。

「パタリロなんてどこで知ったんだよ？」

「魔の三角地帯について学校のコンピュータ室で検索したら出てきた」

「……なるほど」

なんとかまだ思春期入り口の少年との会話が成立しているのに安堵して、最近のアニメを見ていてほんとに良かったと媚びるようなことを思ったが、次の瞬間にはそんなことに安堵する自分の情けなさに気付いて、これではいかんと思ひ直した。

「しかしな、その、わざわざそういう、偏ったその……ビーエルの見方で検索結果を読むのはどうかと思うんだけどな」

「ビーエルってなに？」

よかった。小学生はこうでないよ。

「ううッ！」

突然上がった呻き声に和樹は慌てた。

「おいッ！ 腹、痛むのか?!」

まさか?! リンパ腫はまだほとんど成長してないはずだ!!

「お、お、お腹が——」

そう言っつて、頭だけで前かがみになろうとするヒロキの腹には、グレーの टीーシャツの上に膨らみができていた。その半球が見る見る盛り上がってきて、直径十センチにもなろうとしている。

「う、う、産まれる」

どうやら彼がそれを産むつもりらしいので、パラサイト・イブが少年の腹で目覚めたわけではないようだ。腹の膨らみが消えて、痛みか笑いをこらえるように顔を伏せたまま、ヒロキの右手が可愛らしくお尻から何かを持ち上げた。それは、直径十センチのいわゆる——モンスター・ボールだった。

そう、投げると電撃が走った後パコツと割れて、中から可愛らしいモンスターがヒトの子供ぐらいの大きさに飛び出てくる例のブツだ。何の番組に出ているのかは知らない。いや、ここは大人の事情でおもちゃをどこのメーカーが作っているのかは知らない。いや、ここは大人の事情で細かい描写は伏せておこう。

「それは一体なんのつもりだ？」

和樹が安堵して尋ねると、ヒロキはようやく満面の笑みを浮かべて答えた。

「ブランキオス・ラブラドス——ビーエルだよ。つても、僕が名付け親なんだけど」  
彼が球の上半分に右手をかけて力を入れると、上下半分のところに出来た割れ目が広がり、中から恐竜のビニールモデルが出てきた。アニメに出てくるモンスターなんかよりは恐竜に近いが、目がやたら大きくデフォルメされている。つぶらな瞳の恐竜の赤ちゃんは、もしかするとさつき彼の頭の中でビーエルに合わせて適当にカッコよく名付けられたのかもしれない。

「普通はモンスター育成って育てるだけなんだけど、こいつはぼくが産んでぼくが育てるんだ。産む前に牛乳をいっぱい飲んだから骨も丈夫で強いんだよ！」

そうか、お前は十一歳にして既に父親以上だったわけだ。こっそり母親の仕事も

担ってたわけだね。

——もしかすると、ヒロキも死ぬかもしれない前に何かを残したがっているのだろうか？

自分が父親だから子に何が残せるか、ということを繰り返して自問するのだが、果たしてそれは親に限ったことなのだろうか？

子供はそんなことは口にしないが、それでも何かを残したいと思っているのではないだろうか？

ドラマや映画では、死ぬ前に親の幸せを気にする子供が奇跡みたいにして出てくるが、それも一種親に幸せを残したいという——もしかしたら、未来に自分の遺伝子は残らなくても、代わりに何かを残したいという——代償なのではないだろうか？

父は子を強く強く抱きしめた。

自分の体から子を産むという女性だけの経験が、部分的ながら男性のものとなるイブのことであつた。

## 第十四章 セールスマンの謝罪訪問

「本来は私がご説明申し上げるべきところを、先に医師の方で医学的な裏付けを取ろうとして、たまたま杜都様の診察時間に電話がつながる状況になってしまいました——」

和樹のアパートの部屋を訪れて早々、モレノは玄関先のドアホンに向かって深々と頭を下げた。背が低く異国調の彼のその姿は、過去に日本のセールスマンが海外でエコノミック・アニマルと揶揄された姿はこうなのかもしれないと思い起こさせた。

「やめてください。早く中へどうぞ」

和樹はモレノをアパートに迎え入れる。多少ためらっている振りをしながらも、話を前に進めようという決意ができていた。この間安西のところでは会話を途中で放り出したのが、和樹による提案の拒絶と取られてしまうとヒロキのリンパ腫に手のうちようがなくなる。だから内心では、モレノが来たということ、和樹とヒロキ

の状況に彼らが相当の関心を持ち続けていることが分かって安心した。かくなる上は、自分達の実験材料としての価値を利用して、彼らからCOFなる実験についての情報を可能な限り引き出すのだ。

「基本的にはお願いする方向で考えています。しかし、ご質問したいことが多々あります」

「ありがとうございます。そう言っていたけると助かります」

そう言いながら、勧められた小さな丸テーブルの席に、和樹と九十度の角度で向かうように着く。カバンからタブレットを取り出し、スタンドで和樹の方に向けた。

「ISBが私の大腿骨であるというのは、本当なのですか？」

和樹の率直な質問に、モレノは答える。

「基本的にはそうです。聖十字国際病院のマリセル・サントス医師が言ったことは本当です。これまでお伝えせずに大変申し訳ありませんでした。ただ、私どもは将来の実用化を見込んで技術に対して先行して準備をする必要がありました。もともととご説明した骨折の再生医療に応用できるのも事実です。ただ、近年になって、特に太く丈夫な骨に臓器の再生医療の用途に向いていることが見出されただけで。決

して人体実験だとかそのような——」

「それについては、今さらもう、あえて突かないことにしようと思います。どのみち私には受ける以外の選択肢はありませんから」

二人にしばしの沈黙が流れた後、モレノが提案した。

「ここにお持ちしたタブレットでフィリピンとテレビ電話を繋げば、もっと詳しくご説明できる部分があるかと思っております」

「ぜひお願いします」

こうなったら蟠りを捨てて、あの魔女から情報を引き出すことに集中するのだ。

モレノがテレビ電話アプリを操作して画面が接続された瞬間、頭だけ青白く剃りあげた褐色の肌の子供が、微笑みを浮かべて画面一般に映し出された。

“Deliver hope to suffered children. Donate at [www.deliverhope.ph](http://www.deliverhope.ph)”

「この間は失礼——あ、すいません、このテロップは当院の小児がん撲滅キャンペーンのもので——」

これがその魔女の心理作戦なのだ、今の和樹には分かる。そこで冷淡に答えた。「ご心配なさらなくてください。慣れていきますから」

テロップが消え、丸顔のかわいい中年女が顔を出したが、その顔は詫びているにも関わらず不服そうだった。和樹はとりつくろう隙を与えないようにストレートに尋ねる。

「今回の手術の成功率はどのぐらいなのでしょう？」

「これは世界初の手術ですが、成功率が低いとは考えていません。実際、腎臓移植では世界初の成功例で七十九歳まで八年間生存しました」

「質問を変えます。今までにこのCOFが失敗した例はあるのですか？」

「——ありません。成功例も失敗例もありません。本当の意味での世界初です」  
サントス医師は目を伏せて答えた。

「COFが終わって、病院から退院できるまでに何ヶ月かかりますか？」

「九から十一、およそ十ヶ月です」

女性の妊娠期間とほぼ同じだ。

「これは特別な状況ではありません。女性ならたいい一度は経験することです」  
「あなたは子供を身ごもったことがあるのか？」

「いや、その質問は——」と割って入るモレノを、サントス医師の声が押し返す。

「——あります——杜都さんには非常に申し訳なく思っていますが、いつかはお伝えしなければなりません。私は自分の利益のためにこの研究を始めました」  
そこまで言って、大仏のように目をうすく開けたまま動かなくなってしまった。  
そんな彼女に代わって、モレノが釈明した。

「サントス医師のお嬢さんは1型糖尿病を患っています。サントス医師が個人的に膵臓の再生医療に期待しているのは事実でしょう。黙っていて申し訳ありませんでした」

なんなんだ?! これもお涙ちょうだいの演技なのか?

それとも、俺はここで却って怒るべきなのだろうか?

ガン患者に糖尿病みたいな病気の実験台させんじゃねえよ? むしろ逆だろ? と  
でも?

だが、そんな怒りをかきたてそうな演技をしてどうなる? そう考えると、1型糖尿病の話は案外真実なのか?

## 第十五章 ギジュツ的詳細―ガン臓臓のリサイクル

「死亡のリスクはどのぐらいですか？」

混乱した頭を持ち直すべく、気がつくところごく当然の質問をしていた。しかし、この質問は単純であるにも関わらず回答するのは困難だろう。

「和樹さんのお腹の中で万が一、急性拒絶反応が起こった場合だけそのリスクが生じます。そうならないように全力を尽くしますが、何が起こるか分かりませんから、十ヶ月の全期間当院に入院していただくことになります」

「だけです、と見かけ上限定しながらも最終的には、何が起こるか分からない――か。」

「ですが、急性拒絶反応と言われても、免疫抑制剤を私に投与して再生臓を生着させるんですよね？」

「――言い方が悪かったかもしれませんが。可能性としては、インプラントの方で拒

絶反応の問題が起こるかもしれない、ということですよ」

そう言いながら、サントス医師が目を落としたかと思うと、画面にディスクの写真が注釈入りで映し出された。代わりに、サントス医師の顔は縮小のアニメーションの後に右下の小さなボックスに表示されるのみとなった。CDみたいなディスクには外径3センチ、内径1センチ、厚さ2ミリと書いてある。白いディスクの片面には半透明のシリコンで覆われた機械の塊が付いている。これが臓器を製造するための機構なのだろう。

「臓器を製造するために、骨だけでなく、様々な材料を体内に導入しなければなりません」

いろいろなリスク未確認の物質が和樹の腹に入るということを説明しようとしているようだ。

「ISBのディスクごと、腹腔内で臍尾側に引っ張るために、体外からテンションを調整しなければなりません。しかも、信頼性を確保するため、なるべく電気電子制御などの複雑な機構なしに、所謂カレタやり方です。そのために、トルクマグネットという方式を用います」

画面上では、写真からCGへと変化して、縮小されたかと思うと、周囲に肋骨をはじめとした骨格が描き出された。その数カ所からインプラントに向かって、黄色い線が張られていて、肋骨側の根本に面を体の外側へ向けるように親指大の円板が描かれている。

「肋骨の三箇所から、ディスクに向けて手術糸を通して、そのテンションをトルクマグネットによって微調整します。お腹の外から、中に向かって穿孔なしに物理力を伝えるために磁力を利用するのです。ネジの頭の水平面にN極とS極の棒磁石を貼りつけたようなものを、体内、体外から向かい合わせれば、片方が回転すればもう片方も回転します」

円板から体表を超えた位置にネジが表示され、それが回転すると体内の円板も同じ向きに回転している。

「最初は一日数回、X線で確認しながらの微調整になるでしょうが、最終的には週に一度の微調整で済むはずです。この仕組みのために体内にコーティングされた磁石を入れることになります」

和樹はだたん、しんどくなくなってきた。とりあえず後で見るために紙に印刷した

ものが欲しいので、モレノの手元を見ると、一応用意して来てくれたらしい。封筒を持っている。

「この他にもインプラントには複雑な組み合わせの材料を用います。COFでは、体外の輸液ポンプからカテーテルを通して導入される膵臓細胞として、ヒロキさんの膵臓細胞とiPS由来細胞を比率を調整しながら混合して使用します。iPS細胞によっていずれ機能する膵臓全体を作ることができると言われていますが、現在の技術水準ではiPS細胞から膵臓細胞への『分化誘導』と、機能する様に膵臓の形状を作る『形成』の両方に課題があります」

インプラント材料による拒絶反応のリスクだけ説明してもらえばよかったのだが、彼女の話は別の詳細へと移り始めている。

「その一方で、ヒロキさんの膵臓細胞の方は生着するのに確実なのですが、体細胞はおおよそ50回細胞分裂して細胞死を起こします。従って、iPS由来細胞のための時間稼ぎとして用います。なるべく培養過程によって細胞分裂で寿命を消費しないよう、以前に切除したヒロキさんの膵臓から癌細胞が存在しないとセブンナインで確認された部分を用います。これは当院の技術ではなく、米国の大学に依頼してす

でに最終確認の段階に入っています」

そういうことか!!

しかし、もはやそれほど驚きではない。

大腿骨の時と同じく契約書には記載があるのだろう。膵臓なりなんなり、体から分離した部分は好きにしてくればいい。

トカゲだって切った尻尾を食べるかもしれない。実験して動画を投稿すればミリオンビュー稼げてさぞ面白かろう。

しかし、ここまで体を実験材料に使って、ヒロキの膵臓が再生できなかつた時には覚えていろ。

「ヒロキ細胞が生着している間に、iPS由来細胞はヒロキ細胞に囲まれた生理的条件下で、分化誘導の最終調整を行います。iPS由来細胞というのは、iPS細胞、つまり受精卵に相当する細胞から分化誘導して、膵幹細胞または前駆細胞に相当するところまで至った細胞のことです。これらがiPS細胞化するための山中因

子を導入されていない本来の幹細胞と同等の働きをするのかどうかは、今回人体において初めて確認することになります」

i P S細胞が受精卵に相当するという説明では端折り過ぎだろう。それぐらい俺でも知っている。受精卵に近いのはE S細胞の方で、i P S細胞は体細胞から作られるそのミミックだ。だからE S細胞と違っていくらでも作ることができる。i P S由来細胞というのはi P S細胞から細胞分裂によつて作られて、体細胞としての膵臓細胞に近い段階まで運んだ細胞のことだろう。

「言ってみれば、今回のC O Fについて、私たちは二重の安全策を用意したということ。短期間なら、ヒロキ細胞が機能します。ヒロキ細胞の中にも幹細胞が僅か含まれていますから、数年以上持つかもしれません。その間にi P S由来細胞が膵細胞として機能するようになるでしょう。それさえ成功すれば何十年でももつはずです。そうでなくても、数年持たせる間に、分化誘導の技術は進展するはず」

「それでも…失敗するときには失敗する——ということですよ？ 世界初だから？」  
意地悪そうに和樹はきく。しかし質問しているつもりはない。自分がかぶるリス  
クに対して当然の不满をもらしているのだ。

第十六章 素晴らしき新世界―パパが男を作って僕の代わりを産むシヨック

和樹の不満に対して、サントス医師は顎を引きぎみにして言った。

「すばらしいことだとお思いませんか？」

「？」 和樹には意味がよく分からない。

「和樹さんのお腹の中で、ヒロキさんの臍臓を生み出すのです。女性が子供を生むように、将来、男性が家族のために臓器を生む時代が来るのかもしれない。不謹慎な言い方かもしれませんが、いずれこのように表現されるであろう言い方を、今お伝えしておきます。成功後にメディアで報道されるかもしれないが、なるべく今から慣れていただいた方がいいと思います。つまり日本語では――臓器をハラム時代の幕開けなのです」

「オンナがハラムのはワケが違うだろう!!!」

和樹が思わず大声を上げて、車椅子の車輪が震えたとき、リビングと入口を隔て

るドアが開いて、思いもよらぬ顔がそこにあつた。

「パパ、ほんとに妊娠するの？」

今にも泣き出しそうな顔の小学生が瞬きをしながらノブから手を離さずに立っている。マリンブルーのランドセルの横に付けた、まるまると膨らんだ給食袋が、ドアを開いた勢いを引きずって激しく揺れている。使った後のエプロンやらを適当に畳んで給食袋に押し込むために、軽くて大きなまるまるをランドセルにくつつけて帰宅してくるのだ。

「お前、なんでこんなに早いんだ?！」

「その男の人とどういう関係なの?！」

同時に言ってしまったって、沈黙が流れた。

しまった、そう言えば、マライヒとか言ってたっけ? なんてことだ。違う、そんなんじゃない。確かにこの男は背が低くて美形だが、俺にそんな趣味はない。

「学校はどうした?」

「オープンスクールで早終はやおわりだったんだよ」

「そんなこと言ってなかったじゃないか？」

「クラス便りに書いてあつただろ？ だいたい来ないのに知らせる意味なんてない」  
その言葉に親が車椅子で授業参観に行ったらお前が虐められるかもしれないだろ、  
と言い返そうと思つたが、ヒロキが続けた言葉に愕然とした。

「僕が死んじゃうから、代わりを作ることにしたの？」

こいつ、そんなこと考えてたのか?! 溢れだす思いの中で、モレノがフォローする  
声が聞こえる。

「違うんだ。君のお父さんは、君の臍臓を妊娠することになつたんだ」

妊娠は否定してくれないのかよ!! しかし、ヒロキがモレノの言葉に目を輝かせ  
たのを見て、モレノの説明は小学生には分かりやすいのだと気付いた。

「そのためにフィリピンで長い入院生活に入るんだ。男の妊娠は数が少なく大変  
だからね。フィリピンにはおかまが多いから、日本よりも男の妊娠に理解があるん  
だよ」

おれはゲイの仲間入りなのか?!

「でも、このことは友達には秘密だよ。日本ではオカマはフィリピンほど理解されないからね。パパがフィリピンで入院している間、ヒロキ君も日本の病院に通って治療をがんばろうね。おじさん達が手伝ってあげるから」

モレノの優しい声に、ヒロキは、何も言わず、だたこっくりと頷いた。

もしかして、今の説明で、納得した?!

妙な話になったが、ヒロキが納得してしまった以上、いろいろな話が済んでしまった。

ある意味、モレノは天才的なセールスマンであった。

納得したヒロキは、和樹が隣の部屋に行くように促すと、ビールを卵に入れて遊びはじめたようだ。

このところ、かつこ良くするために、他の恐竜の足と交換して入れてみているらしい。

ヒロキが隣の部屋に去った後、空気が読めない女性医師が余計なコメントを口にした。

「当院は、ご要望があれば性転換手術も承ります。フィリピンはタイに次ぐ性転換大国ですから」

## 最終章 ゼウスの腿

「これがドナーの体内で再生された、移植前の膵臓片です」

大型ディスプレイに表示されたグロテスクな体内写真を指して、司会役の男性教授が胸を張って解説した。彼の前には長机があり、いっしょに並んだ数人の発表者の前には、ところ狭しとマイクが並べられている。ただしそれは聖十字国際病院でのことではない。サントス医師が非常勤講師をしており、今まさに教授に昇格しようとしているフィリピンの大学での記者会見である。

「COFと移植手術は私の研究室の成果を元に聖十字国際病院で行われました。病院へは当研究室からマリセル・サントス博士が出向き、再生医療のスペシャリストとして治療をリードしました」

男性教授は、聖十字国際病院の関与が、COFにとってあくまで間接的なものであったことを強調する。現在稼働中の病院経営にとって、この記者会見はリスクが高すぎたため、成果とリスクは一時的に全て教授の手元に集約されたのだ。

一人の記者が、スキャンダルの匂いに思わず舌なめずりしてしまうのを隠しながら、患者の人権を無視した医学の暴走に対して憤み深い危惧の言葉をなげかける。

「ギリシャ神話では、全能神ゼウスがセレネとの間にディオニュソスを生んだ時、冥界神ヘルメスはセレネから胎児を取り出して、ゼウスの大腿に縫い込んだと語られています。サントス医師、あなたがその死神ヘルメスではないのですか？」

その質問を予期していたかのように女性医師は毅然として答えた。

「そんな胎児もセレネもいません。再生医療に用いたのは、ES細胞ではなく、iPS由来細胞と膵臓細胞の混合です。膵臓細胞はガンのために前回の移植手術で切除された、患者本人の膵臓からガン細胞を除去したものを用いました。ですから今回のゼウスは、彼の息子の体からガンに侵された臓器を受け取り、再生させた上で持ち主に返したのです。これこそ倫理的にも神の成す技だと思いませんか？ ドナーの男性が副作用に耐えながら行った行為は、まさに神話を超える偉業であ

り、愛ゆえになせる業なのです」

記者会見の広い会議室に散りばめられたサクラ達からぽつりぽつりと拍手が起こり、やがて拍手の渦は会場全体を巻き込んだ。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

誤字脱字、てにをはの間違い、おかしな表現、ぜひご指摘いただけるとありがたいです。

一つ一つ直すことはできませんが、次の版を出す時になるべく反映させたいと思っております。

お気に入りも入れていただけるとなおります。

実は、この小説は、倍ぐらいの長さまで書いたのですが、後半が長すぎて過激すぎて読んでもらえそうにないことが判明したため、前半を切り出したものです。

皆様の応援があれば、がんばって後半を仕上げると思います。

それでは。

### 参考文献

「認められぬ病」柳澤桂子

## ゼウスの腿

<http://p.booklog.jp/book/66881>

著者 : sumikakusato

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sumikakusato/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/66881>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/66881>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ